PICK UP MOVIE

©2019 Factory Gate Films. All Rights Reserved.

羊飼いと風船

〔2019 年／中国／チベット語／ 102 分〕 出演：ソナム・ワンモ、ジンバ、ヤンシクツォ　監督・脚本：ペマ・ツェテン

神秘の地・チベット――

変わりゆく時代の狭間で生きている人たちがいる。
牧畜で生計を立てながら、大草原で暮らす家族。
近代化の波が押し寄せ、長年にわたり受け継がれてきた
営みが揺らぎだす――

〔あらすじ〕神秘の地・チベットの大草原で暮らす三世代の家族。祖父は変わりゆく時代を憂いながらお経を唱え、若夫婦は 3 人の息子たちを養うため牧畜をして生計を立てている。いたずら盛りの子どもたちは、のびのびと大草原を駆け抜けている。昔から続く、慎ましくも穏やかな日々。しかし、受け継がれてきた伝統や価値観は近代化によって変わり始め、中国の一人っ子政策の波が押し寄せていた。そんなある日、母・ドルカルの妊娠が発覚する。喜ぶ周囲をよそに、望まぬ妊娠に母の心は揺れ動く。伝統的な信仰と変わりゆく社会の狭間に立たされ、次第にすれ違う家族―葛藤の末、彼女が選んだ道とは…

〔上映日程〕5/1～14（休映：5/6、10）

チベットにまつわるお話（その1）

5/1 sat

伝統と近代化の間にあるもの

聞き手：小川康（チベット医・薬剤師）
ゲスト：星　泉（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）
映画上映：10 時～　トーク：11 時 45 分～

星 泉…東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授。チベット語、チベット文学、チベット映画を研究。『羊飼いと風船』など、ペマ・ツェテン監督作などの字幕監修も務める。横浜市在住。

小川康…チベット医（アムチ）・薬剤師。1999 年にインドに渡ってチベット語を学び、外国人としてはじめてのチベット医（アムチ）となる。現在、上田市の山奥で「薬房　森のくすり塾」を開業。

都市化が急速に進む世界、人間の心はどこへ行くのか

チベットの見渡すかぎりの大草原。三世代家族が羊を飼って暮らしている。羊が生まれて育って死に、その傍らで人間も生と死を紡いでいく。大自然に溶け込んで暮らしているかに見える彼らにも、近代化や市場経済の波は押し寄せている。馬はオートバイにとってかわられ、町の学校で子供を学ばせるためには現金収入が必要だ。

中国政府からの圧力もある。監督は映画検閲を潜り抜けるのに苦心したというから、この点の表現はさりげない。祖父はなにかにつけ観音菩薩の真言を唱えるが、彼の世代は文革時の手ひどい宗教弾圧を経験しているはずだ。草原をいったん離れれば、学校にも病院にも毛沢東語録から引用された標語が掲げられている。父親が町で幼い息子たちに風船を買うときは、普段話しているチベット語ではなくたどたどしい中国語を使う。何かと話題にのぼる新疆ウィグル自治区のように、チベット自治区でも漢民族流入や同化政策が進みつつある。

では伝統文化を守ればよいのかといえば、そう単純ではない。母親が 4 番目の子供を妊娠したことで、それがあらわになる。人間の魂は不滅で生まれ変わる、という伝統的な考えが母親には重荷になる。一方で 4 人以上の出産には中国政府により罰金が課される。けれども苦境に立たされた母親には、自分を見つめなおす尼僧院という場があった。現実と伝統のはざまで母親がどんな決断を下すのか、祈るような気持ちで送り出す家族のやさしさが心に沁みる。

ラストシーンは天空をゆらゆらと舞う赤い風船だ。さまざまな人がそれに目をやるが、世界の各地で伝統文化が消滅の危機にあるいま、皆それぞれに人間の心の行方を見守っているように感じられる。

tamura shizue
田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983 年からホウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。